Boston Scientific
Advancing science for life™

福島県立医科大学 会津医療センター附属病院 消化器内科

【住所】福島県会津若松市河東町谷沢字前田21番地2 **【センター長】**髙久 史麿 先生（日本医学会会長） **【院長】**鈴木 啓二 先生（総合内科学講座 教授） **【病床数】**226床 **【診療開始日】**平成25年5月13日 **【内視鏡検査・治療総件数（平成25年度見込み）】**EUS：約500件、ERCP：約250件、上部消化管内視鏡検査：約2,600件、ESD：約100例 **【スタッフ】**常勤医師7名 **【保有内視鏡】**上部消化管内視鏡15本（拡大内視鏡含む）、下部消化管内視鏡10本、コンベックス型超音波内視鏡3本、ラジアル型超音波内視鏡2本、側視鏡3本（治療用含む）、経口胆道鏡1本、軟性胆膵鏡1本、ダブルバルーン用ショート1本・小腸用1本

国内外から人材が集まる学びの場を目指して 最先端の内視鏡診療と専門医育成に尽力する

最新の医療設備と優れた人材を備え 会津地域の先進医療を担う新病院がオープン

福島県立医科大学会津医療センターは、教育研究･診療を併せ持つ新しい福島県立医科大学の機関として、平成25年5月に開設されました。また、従来の福島県立会津総合病院と福島県立喜多方病院が統合され、会津医療センター附属病院として同月に診療が開始されました。従来の「診療」を中心とした一般病院から、大学施設として最先端の医療を地域に提供するとともに、学生や研修医の教育、臨床研究を行う機能も合わせ持つ施設として生まれ変わりました。感染症対策やへき地医療支援などの政策医療にも積極的に取り組み、地域医療機関との連携により会津地域全体の医療を支える役割を担っています。また、今後は大学院設置も検討されており、研究面においても更なる発展が期待されています。

前身の県立会津総合病院時代から当地で診療にあたられている澁川悟朗先生は、「会津総合病院は会津若松市の中心部で地域医療の根幹を担ってきましたが、会津医療センターとなった現在はより広域の医療機関からの紹介も増え、会津医療圏以外の遠方から来院される患者さんも増えています。それと同時に消化器内科がカバーする疾患の幅も広がり、地域から期待される大学病院としての役割を改めて実感しています」と仰っています。従来と比べて業務の質と量が大きく増えましたが、「会津医療センター準備室で入澤篤志先生にリーダーシップを発揮していただいたので、スムーズにオープンを迎えることができた」と言われる澁川先生。設備の充実を図る施策や、若手医師やコメディカルに対する大学病院レベルの教育やトレーニングなど、経験豊富な入澤先生が自ら様々な工夫や取り組みを指揮されたことで、ハード･ソフトともに充実したスタートとなりました。

消化器内科学講座 教授
入澤 篤志 先生

消化器内科学講座 准教授
澁川 悟朗 先生

患者さんの利益につながる低侵襲医療の推進のため 新しい治療法やデバイスの開発に努める

消化器内科では、膵臓、胆道疾患、上部消化管疾患、門脈圧亢進症関連疾患等に対する最先端の内視鏡診療を幅広く行っています。特に、膵臓がんや消化管粘膜下腫瘍等に対する超音波内視鏡を用いた診療については、入澤先生を中心に多くの診療実績を重ね、国内における手技の普及と標準化に尽力しています。現在は、超音波内視鏡画像から組織診断を行う機器の開発や、超音波内視鏡を用いた胃静脈瘤に対するコイル塞栓術など、超音波内視鏡の可能性を広げる新しい治療法やデバイスの開発を通じ、日本ひいては世界の内視鏡医療の発展のために日夜研究を重ねています。また、福島県革新的医療機器開発実証事業（医師主導治験）として、民間企業と共同で「胃用誘導型カプセル内視鏡システム」の開発にも着手し、平成26年の治験開始に向けて準備を進めていま

▶次ページへつづく

福島県立医科大学 会津医療センター附属病院 消化器内科

す。これが実現すれば、受診者の負担を軽減し、検診率向上と疾患の早期発見が大いに期待されます。入澤先生は、「先進医療を行う施設として、世界標準とされる基本的な内視鏡診断と治療に加えて全く新しい治療法を創造し、患者さんにその利益を還元することが当施設の重要な役割と考えています。今後も患者さんの負担をさらに軽減するための低侵襲医療の開発と実現に取り組んでいきたい」とお話になりました。

最も大切にしたのは教育の“受け手目線” 学ぶ意欲を高め優れた人材を育成する環境づくり

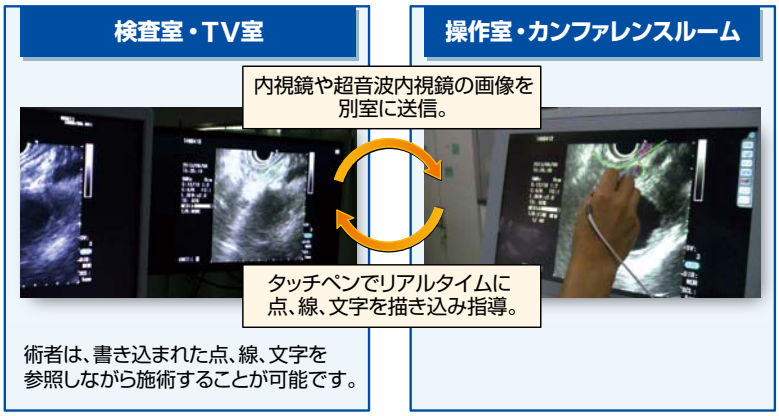
質の高い医療の提供と先進医療の開発もさることながら、消化器内科で最も力を入れているのは人材育成です。会津総合病院で入澤先生の指導を受け、現在は消化器内科勤務の二階堂暁子先生にお話を伺いました。「ERCPやEUS-FNAなど、多岐にわたる手技を研修の初期段階から経験させてもらえました。先輩や同僚の手技を見る場合でも、体験から自分に当てはめて課題や疑問が生まれるので、より主体的に学ぶことができます。」同じく山部茜子先生は、「臨床だけでなく学会や研究会で発表する機会も与えてもらっています。大学施設として新しい治療や研究を発信する仕事に携われることは大きな刺激になっています」と仰っています。「学んだことを自分の言葉で人に教えらえるレベルまで育成することが目標で、そのためには自分が目にしたものを論理的に捕えることが重要」と言われる入澤先生。

このような指導方針を具現化するため、消化器内科では世界でも内視鏡室への設置は初となる「アノテーションシステム」を導入しています。これは、操作室とカンファレンスルーム双方に内視鏡や超音波内視鏡画像を同時に映し出し、画面上にタッチペンで書き込めるシステムです。これにより、画像を見ながらリアルタイムな描画による指導が可能となります。入澤先生は、「指導医が横に立って画面を指差しても正確に意図が伝わらないこともあります。点ではなく線や文字を表現できることで情報が多くなり、受け手側がよりイメージしやすくなります」と説明されました。実際にこのシステムで指導を受けた阿部洋子先生も、「内視鏡診療では2次元画像の情報から隣接する臓器や血管走行などを重層的に理解する必要がありますが、このシステムで指導を受けると視覚と言語情報がリンクしやすく、手技中の理解度が深まります」と感想を述べられています。

消化器内科では専門性を身に付ける志を持った医師の受け入れも積極的に行っており、既に2名の医師が他県から来院･勤務し、最新知識や技術の習得のため日常診療にあたっています。そのうちの一人、忌部航先生は、ご自身の専門性を高めるため東京から来られました。「入澤先生や澁川先生のようなエキスパートの先生に直接指導していただけるのはとても貴重な環境。内視鏡の視野と解剖の関係など、基本から丁寧に教えていただいているので、どう教えられると分かりやすいのか、指導法も学べています。自分が指導する立場になった際にぜひ実践したいです。」もう一人、群馬から来られた星恒輝先生は、超音波内視鏡を学ぶために研修先として会津医療センターを選びました。現在では胆膵分野に留まらず、上部消化管のESDなどの多岐にわたる診療を経験されています。「様々な疾患に対する診療を経験したことで、自分の応用力が高まったと感じています。あと一工夫を加えなければならない困難な局面では、こうした経験が活かされると感じています。」

消化器内科では「学ぶ側がまず自ら実践し、経験する」ことを重視し、指導医は必要に応じたサポートのみに徹しています。澁川先生は、「もう少しできっかけを掴めそう、あるいは掴もうとしているタイミングを見定めるようにしています。若い医師が多いので、互いに意見を言い合えるような明るく闊達な雰囲気を作ることも大切。他県からいらした2人の先生は、もともと高い技術を備えていた上に学ぶ意欲も旺盛なので、他の先生方の良い刺激にもなっています。」と仰っています。入澤先生は、「全員が同じ方向を向いて診療にあたることが重要。そのためには一つの症例を同じ状況で理解することが大切で、可能な限り全員で症例に臨むようにしています」と言われ、個性を伸ばす自由な環境と基本的な方針の一致を両立させることが、教育の場では重要だと強調されました。

最後に入澤先生は、「今後も継続して国内留学を志す医師の受け入れを推進し、全国の先生にとって魅力ある研修施設として発展していきたいと考えています。そうすることで当施設全体のレベルアップにもつながりますし、結果的に地域医療にも貢献できる。そのような好循環を生み出していきたいです」と、今後の展望を語っていただきました。



アノテーションシステムのしくみ

消化器内科のみなさん

© 2013 Boston Scientific Corporation or its affiliates. All rights reserved.